

日蓮聖人御系譜の研究（續）

鈴木智好

◎井伊氏赤佐氏貫名氏の關係

井伊盛直の第三子赤佐三郎俊直が井伊氏から分れて横尾に住したのは一八〇九年である事は前項に既に述べた。而して貫名政直が父盛直から分れて貫名に下つた事もやゝ明となつた。共資、共保當時遠江に十二郡を領してゐた井伊氏は此處に赤佐、貫名の分家を出したのである。貫名氏の祖政直に二子があり、長子は行直、是は貫名の二代を繼ぎ、次子の直友は石野に下つて石野の祖となつてゐる。此の石野の事蹟に就ては何等知る由がない。

横尾に下つた俊直は、其の子共俊、共俊の子共明と三代横尾に住してゐた事は奥山舊記によつて明である。共明の子朝清が井伊谷を去る一里の奥山に城を築き此處に住した。朝清以來代々奥山氏と名乗り奥山城に居住し、横尾には田力文右衛門を先祖の墓守として置いた。此の奥山城は後南北朝時代、井伊の本家と共に官軍に味方して大いに忠勤を勵んだのである。今遠江風土記によるに

奥山古城

奥山六郎曰昔遠江介、井伊介族人奥山次郎藤原朝藤之城也。子孫世々住。而延元元年京師兵亂之時、後醍醐天皇御子宗良親王入御此城也。慶安四年無文禪師入御之時、朝藤建立方廣寺喜慶元年二月十五日朝藤卒去、子孫相續領知奥山也。足利將軍十三代之時、城主奥山因幡守不應台命而落城、其子奥山源太郎住居于城下。○城跡在村中高平、郭外三方溝、郭中正南礎石存焉。乃謂諸人曰奥山城去井伊谷古城一里。

南方傳記曰、元弘建武の亂の時は、井伊介道政官軍に屬て戰功あり。延元元年十月後醍醐天皇叡山より吉野へ遷幸の時新田義貞は一宮尊良親王の供奉て北國へ赴き井伊介道政は第二宗良親王の供奉て叡山より遠江國井伊谷へ歸り同郷奥山に楯籠り、近隣を隨て宮を守護し奉る。

太平記卷十七（延元元年十月十日）曰、東宮一宮中務卿（尊良）親王北國へ行啓、妙法院宮は御船に被召て遠江國へ落させ玉ひ、阿曾宮は山臥姿に成て吉野の奥へ忍ばせ給ふ、同記

龍潭寺は萬松山と號し聖武天皇の御宇天平聖歷五年（一四一三年）に行基菩薩の開創に係り當時は八幡山地藏寺と號した。即ち寺後に八幡社あり本尊は行基菩薩自作の地藏尊を安置せしを以て斯く號したのである。後寛弘七年正月元且共資八幡社の井中より一子共保を得、是に井桁に橘の紋所を與へ井伊を姓とせしめた。共資は村櫛に逝去し、共保以來代々此寺に葬り菩提寺となる、是れ井伊家の源をなすのである。共保逝去して自淨院殿行輝寂明大居士と號するより地藏寺を改めて自淨院と稱した。越へて延元元年井伊道政、高顯、後醍醐天皇皇子宗良親王を奉じて義軍を挙げ井伊城に立籠りしが武運利なく、元中二年八月十日親王は空しく井伊城に薨じ給ひ其の御法號を冷湛寺殿と申し奉りし故に此の時又自淨院を冷湛寺と改めた。後又龍泰寺と改め、永祿三年九月十九日井伊直盛桶狭間に於て戦死し龍潭寺殿と號するより又改めて龍潭寺と稱するに至つた。東山天皇御菩提の爲として、東山天皇御宸翰にて張方の地藏尊其の他御調度品等御寄贈あり、明治維新に際しては百石の朱印は大半上地となつた。又舊境内を裂きて宮を建て宗良親王を祭る之れ官幣中社井伊谷宮である。如斯龍潭寺は由緒深き古刹である、特に今言はんとする井伊家とは深き關係を有し、井伊家が彦根に國替へになるに及んでも當主の逝去せし時は龍潭寺より寺主がわぎ／＼彦根に赴き法華經一部を讀誦回向した。如斯井伊家と法華經とは舊より深く結ばれて居る。然るに今回我が門下によりて發見されたる共資公墳墓が九百五十年已來初めて法華經

の供養を受けたるは其の悦びや果して如何ばかり、更に此の供養を待つ事の切なりしを拜祭する。如斯法華經と因縁淺からざる井伊家の末より我が宗祖を出したる事蓋し偶然とは思はれない。龍潭寺は初め三論宗より天台に更に禪宗に改り現在京都妙心寺派に屬し、開創以來數回の火災に遭ひ古書物の大半及び寶物の殆んど烏有に歸してしまつた。因に共資、共保時代は三論宗であつた様である。行基菩薩開創當時は三論宗で、宗良親王の頃に至つて天台宗に改宗し、今より四百年程前更に禪宗に變り今日に至つたのである。其の間世々井伊家の菩提寺として井伊家加護の下に今日に及んだのである。而して井伊氏は共保以來井伊谷に居城し、二十三代直政の時三十五萬石彦根に國替へとなつた。即ち慶長九年皇紀二二六四年に彦根の城主となつたのである。

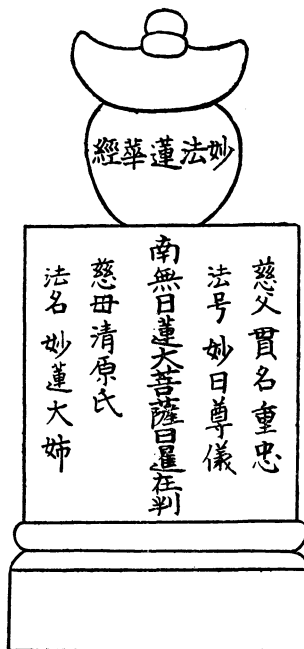
井伊家と法華經とは前述の如く深い因縁關係に置かれ、徳川末期に至り一身を犠牲にして幕府の爲に己が信念に邁進し、最後櫻田門外に於て水戸浪士の爲に一命を捨てた井伊掃部頭直弼も正しく共保より三十八代の正裔である。あの信念を獲得したる掃部頭は熱烈なる法華經の信者であつた。是と彼とを思ひ合せる時、むしろ當然の様な氣がする。現主伯爵井伊直忠伯は四十代である。以上大体井伊家と龍潭寺の關係は述べ終つた。

次に井伊氏より貫名氏の分れたるは何年頃かと言ふに、井伊の五代盛直の四男政直が貫名に下つた事は明であるが、其の事蹟に關しては一として知る由がない。遠州貫名山妙日寺は政直

が城を築き住せし跡なりと言ふ。身延山第四世日善聖人の開創せられたる寺であると言はれる。其の緣起に

其保より四代を井伊左衛盛直と稱す。盛直に三男あり、一を井伊次郎良直と稱し(是れ井伊家の嫡流なり)二を赤佐三郎俊直と稱し、三を四郎政直と稱す。政直所領を分ちて山名郡を知行し、貫名の里に館を築き住す。故に貫名を以て氏とし、貫名四郎政直と號す。是れ貫名の始祖たり、其貫名次郎行直其の子貫名五郎重實に相續し其の子貫名次郎重忠高祖大菩薩の御父なり。

と言ふのみで其の分れたる年代等には何等觸れてゐない。現在妙日寺には貫名氏先祖の古墳と稱するもの三基ある。是れ先に石野にありしものにして、明治四十年頃妙日寺に移せるものである。貫名四郎政直、貫名次郎行直、貫名五郎重實と標札が立



つてゐる。然し是れが果して先祖の古墳なるや明でない。是れは大凡七八百年前のものである事は間違ひない。政直が初め井伊より分家して石野に住したと言ふ記録はない、傳説によれば其の古墳に觸るゝものは必ず病を得ると、人恐れて近寄らなかつた。後には貫名といふ字のかすかにあつたのを見て貫名の先祖なりとして現在地に移したといふ、今は何が書かれたか不明である。政直以來貫名に住し逝去の後石野に葬りたる記録あれば、之を以て先祖の古墳と見る事が出来るが、かゝる記録は更にない。政直に二子があり、長子は行直、次子は直友と言ひて直友は貫名から更に分家して石野の先祖となつてゐる。然るに其の石野氏に就いては知る由がない。惟ふに石野の如中にありし此の古墳は或は直友以來の石野家のものに非るか、若し石野家のものとすれば貫名山に於ては全々別物をお祭りしてゐる事となる。更に研究を要する事

向 左

正保三年龍集丙戌
正月十三日於延峯誌之

向 右

奉加繙素責
謹造○

本願沙門 ○○○○

である。故に此の貫名氏の先祖に對しては知る古事が一もないといふ事になる。次に同寺に於ける御兩親に就ては圖の如き御石碑及び碑文がある日蓮聖人とは、延山二十六世知見院日蓮聖人の事で貫名山中興ノ開山である。入寂は慶安元年九月廿九日皇紀二三〇

八年で、正保三年は皇紀二三〇六年で聖人入寂の前三年に當つてゐる。故に此の碑は聖人入寂前三年に建立せられたもので、今より二百九十年前のものである。貫名山の開創は延山四世日善聖人であり今より六百四十年前である。此の間妙日寺に於ては石碑等無かつたものか、御先祖に對する研究は如何、然も明治四十年頃迄御先祖の石碑も建てなかつたのであらうか。而して若し日善聖人が眞に同寺の開山とせば宗祖滅後直ちに俗姓に關する研究が行はれ御先祖の御舊蹟の保存が議せられたとせば宗祖御俗姓の研究も今日の如く至難なものではなかつたらうと思ふ。再考するに日善聖人の開創は後人の憶測によるものならん日善聖人開創が事實とせば吾人の研究に多大なる力となるものである。

◎御兩親に關する研究

如斯賈名氏先祖に關する研究は至難中の難事である。然し此處に其の分家せし年代を倭直の分家より推して、賈名に初めて分家したのは皇紀一八一〇年となるのは既に前述の如くである而して其の居住の地及び墳墓地は未だ確證を得ざる故何んとも言へぬ。諸賢の研究に俟ち其の何れの地なるやを明にし以て宗祖への御報恩の一端とせられん事を。

上來井伊、貫名の關係は大体述べ終つたから本項に於ては、然らば盛直から分れたる貫名氏は如何なる系統をたどりて重忠に至り、重忠は如何なる理由によりて小湊に流罪になつたかを

確めよう。

前既に文献の全部を出したから本項に於ては特に必要なる部分のみ抄出して研究を進めて行く。

一、系圖御書

重實——貫名仲太

仲四

二、長祿寬正記

盛直——良直

俊直

三、宗旨名目

重實——貫名仲太

仲三一日蓮

四、元祖化導記

重寶——長男

重忠
藤太

天 死

日 作
軍 良

藤平

讚

五、註畫讀

重忠——四男日蓮

六、連祖家譜

政直—行直—重實—重忠—日蓮

七、貫名氏系圖

盛直—良直—俊直—政直—直友—直行—重實—重直—重忠—藤太—早死—日蓮—重友

八、眞實傳

盛直—俊直—政直—行直—重實—早世—藤太重政—仲三重仲—藥王丸—藤平重友

即ち「系圖御書」「宗旨名目」「化導記」等は重實以前には觸れてゐない。註書譜には「重實の次子重忠也。師は其ノ第四子也」と言ひ是又重實以前は語つてゐない。「寛正記」によれば盛直以來を語つてゐる。是等の文獻によれば各異説を出してゐる。盛直には古來三人の子があつたとしてある。所が非伊氏の系圖に

は良直は次子次郎と呼び、俊直は第三子で三郎と稱し、政直は四子で四郎と呼んでゐる、故に此の三人以外に長男があり早世したと見るべく、依つて兄弟四人で政直は第四子となるのである。政直に一子と言ふ説と二子との説との兩様がある。第二子の直友を「連祖家譜」では行直の子としてある。事實はやはり「貫名氏系圖」「井伊氏系圖」の如く政直の次男とするのが正當である。行直の子が重實であつた事は皆一樣である。然し重實を重眞と作つてゐるのがある「連祖家譜」がそれである。重實の子が三人だつたといふのと二人だと言ふのと、又は一人だつたと言ふのと三様がある。「系圖御書」系統では三人である。長男は早世し、次男仲三とは重忠の事で、三男仲四とは如何なる人であつたかは明でない。何れにしても重實には三人の子供があり、重忠が貫名を相續した事は明である。次に重忠に子供が四人だつたと言ふのと、五人だつたと言ふのと二様がある。「化導記」「註書譜」「眞實傳」では五人と言ひ、貫名氏系圖では四人となつてゐる。仲三郎が入るか否かで異つて來るのである。故に宗祖は重忠公の四男といふ説と三男と言ふ説と兩方があるのである。御兄弟の中末子の藤平のみはあつた事が事實であるが、其の他に就いては知る由がない。藤平の末孫は現在下總道野邊で藤平を姓して曾て縣會議長を歴た程の名門として今日猶榮へてゐる。

宗祖は御書中に御父が貫名重忠であり、御母が梅菊御前であつたなどとは仰せられてゐない。只諸所に父母、父母と言ふ御

言葉を御使ひになつたのである。故に御書を通じて御父が貴名重忠であり、御母が清原氏であつたと知る事が出来ない。然らば何故に御兩親の御名を出さなかつたかと言へば次の如く考へられる。

宗祖開宗以來迫害は御自身のみならず門下檀越に迄及んでゐる。若し父母の御名を出して父母に迄迫害の及ぶ事を恐れて特に父母父母と仰せられてゐたと思はれる。又御兩親は領家の尼御前とは特に親しく交際してゐた程由緒ある名門の末であるから宗祖折伏の反響で御兩親の御赦免が後れてはならないと考へたから、此の御兩親と領家の尼御前と親交のあつた事は、

領家の尼御前は、女人愚痴なれば人々の云々怖せば、さこそとましまし候らめ。されども恩を知らぬ人となりて、後生に惡道に墮させ給はん事こそ不便に候へ共、又一には日蓮が父母等に恩をかばらせたる人なればいかにもして後生を扶け奉らんこそ祈り候へ。(清澄寺大衆中御書)

と領家と御兩親とは相當親しい間柄であつた事が知れる。一面是を以ても宗祖が一般賤民の子でない事も知れる。

又宗祖が門下又は主なる檀方に御書を御興へになるに際し大休御兩親の姓名は御承知であらうと御察しになつて特に御名を出さなかつたとも考へられる。又前述の如く本地の開顯法華經の行者としての日蓮たる事を闡明せんが爲であり、又四姓平等を説き階級打破を基調とせる佛教なる故特に賤民の子と仰せられて御兩親の御名を出さなかつたのである。

さて然らば重忠は如何なる理由によつて房州に流罪になつたかを檢して見よう。

「系圖御書」「宗旨名目」には一家所領の争といひ、其の他では平家に與力した結果との二説がある。山川博士は「何かの罪で安房に流され給ふた」と言つてゐる。「化導記」には重實の代に流罪になつたと言つてゐるが、其の他では重忠の代といふ事になつてゐる。重忠の代が正しいのである。

重忠公御歳三十二建仁三年五月七日安房國へ流罪になつたのである。建仁三年は一八六三年に當り、共資公下向から二百十三年後である。此の時重忠公三十二歳であつたから其の誕生は承安二年皇記一八三二年である。而して正嘉二年二月十四日御逝去遊ばされてゐるから、八十七歳で御逝去遊ばされたのである。

日蓮聖人御誕生は重忠公御流罪になつてから二十年目即ち皇紀一八八二年共資公下向から二百三十二年後で今より七百十四年前であり、重忠公五十一歳の御時である。又宗祖開宗の建長五年四月廿八日は重忠公の八十二歳の時に當つてゐる。

悲母梅菊御前は、重忠公より九年後の文永四年八月十五日御逝去遊ばされてゐる。皇紀一九二五年で宗祖御年四十六歳の御時である。此處に一言しなくてはならない事は、御母の事である。御母は清原氏で、下總八幡郷大野吉清の女で、道野邊右京亮の孫だと言ふのと、山崎左近兼良の女だと言ふのと、の兩説があり、御名を梅菊、又は菊千代と名けたと言はれてゐる。山崎

兼良は、舍人親王五十五世の孫北面の武士であつたと言はれてゐる。今一般には清原氏で大野吉清の女であつたと言ふ事になつてゐる。惟ふに重忠公が安房に移された當時は未だ獨身で小湊に来てから梅菊女が嫁せられたと見るべきである。宗祖御遊學中の費用一般は富木氏によつて得られてゐた様である。傳説によれば、富木、曾谷の人々はやはり遠州の武士で、貫名氏の同族であつたと言はれてゐる。又大野氏の一族だとも言はれてゐる。何れにしても御兩親の何れかの御一族であつた事は間違ひない。又光日房は宗祖の叔母、向師の母と御遺文にある。故に向師は宗祖と從兄弟となる、更に研究を要する事である。

古來梅菊女の御年齢に關しては何人も觸れてゐない、文永四年御逝去とあるのみである。星野氏は、

文永元年歸省の時に急病で昏睡狀態に陥つた事がある、其の

時八十に近かつたのです。

と言ふ。小生も種々研究の結果此の星野氏の説を採用したい。故に御逝去の文永四年は御歳八十三であり、建仁三年重忠公御流罪當時は十九歳となるのである。重忠公三十二歳、梅菊女は十九歳頃小湊に流罪になり、此の頃重忠公に嫁せられたとすれば少しの無理もない。されば文治元年皇紀一八四五年御誕生で宗祖を御誕生せられたのは三十八歳の御時となるのである。而して重忠公御逝去の時は、御歳七十四歳であつた。御兩親が無くなられて初めて碑の建てられたのが元徳元年であるから母君御逝去より僅かに六十三年目、宗祖滅後四十七年にして既に妙蓮寺が建立されたのである。

上來述べ來りたる家譜に關する年代を略圖に示さば左の通である。

名	姓	逝去年月日	住所	墳墓地	皇記	逝去ノ年	共資下向ヨリ	現在ヨリ	宗祖誕生ヨリ
鎌足	賜藤原	白鳳八年十月十六日	京都	談山神社	一三二九	五六	三二一前	一二六七	五五三
共良	三國ノ祖		京都						
共資	藤原	下向正歷元年六月	村櫛	村櫛	一六五〇	大凡七十五六		九四六	二三二
共保	井伊祖	誕生寛弘七年正月元旦	井伊谷	井伊谷	一六七〇	八四	二〇	九二六	二一二
共家	井伊二代	逝去寛治七年三月廿日	龍潭寺	龍潭寺	一七五三		一〇三	八四三	一二九
共直	井伊三代	永長九年出陳	村井伊櫛		一七五六		一〇六	八四〇	一二六
惟直	井伊四代	十月十五日							

盛直	良直	俊直	行政直	重實	重忠	梅菊	宗祖
五代	六代	赤佐ノ祖	貫名ノ祖	二代	三代	四代	清原氏
五月十四日							
誕生 承安二年	誕生 文治元年	逝去 正嘉二年二月十四日	逝去 文永四年八月十五日	誕生 貞應元年二月十六日	開宗 建長五年四月廿八日	入滅 弘安五年十月十三日	
井伊谷	横尾	貫名	小湊	小湊	小湊	小湊	池澄上
身	身	身	身	身	身	身	身
延	湊	湊	湊	湊	湊	湊	延
一八三二	一八六三	一九一八	一九四七	一九八二	一九八二	一九八二	一九四二
三二	三七	八七	八三	三二	三二	三二	六一
一八二	二一三	二六八	一九五	二七	二六三	二六三	二九二
七六四	七三三	六七八	七五一	六六九	七一四	六八三	六五四
後	後	後	後	後	後	後	後
五〇	一九	三六	三七	四五	四五	四五	四五

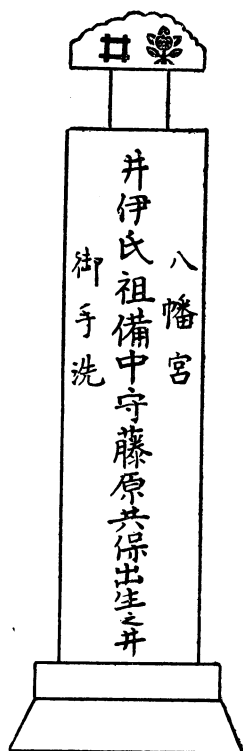
以上を以て宗祖御系圖の研究を終り、以下縁祖共資公に就て語らんとするのである。

◎縁祖共資公村櫛居城

共資公京より下向し村櫛に居城し此處に城を築き志津城と名け子孫の居城と定めた事は前既に略是を述べた。即ち共資公年三十歳正暦元年六月勅命を奉じて、夫人と共に遠州の國司として遠江國に赴任し村櫛に城を築き住したのである。遠江に十二郡駿河三河に幾かの地があつた様である。共資に男子がなく、

後繼に非常に苦心せられた、毎年正月元旦には隣村の氏神自身の守護神たる井伊谷八幡宮に参拜し良き後繼者の得られん事を祈られたのである。下向後廿一年目即ち寛弘七年例年の如く多くの供を従へ、参拜を濟せ神主と共に石段を下らんとする時石垣の傍の井戸の中に赤兒の泣聲が聞えた、是れ神の與へと喜び成人の後自身の後目とせんと神主に命じて是を補育せしめた。時の神主は西尾權守と言ひ其の子孫を西尾常吉と言ひて今に存するのである。此の西尾權守は自身では養育出来ぬ故寺内に住せし野澤某に授乳せしめたのである。野澤氏は七歳迄其の子を

養育し、天性明敏なりし爲め共資公之を養育せんが爲に城内に連れ我が子として文武の道を教へ、二十歳になるに及び其の女を嫁せしめて後繼とし、共保と名け出世の因縁に因んで井桁に橘の紋所を與へたのである、共保より代々井桁を以つて外紋とし、橘を以て内紋とした。當時は井桁と橘とは別々の紋所であつた。然るに現在日蓮門下の代表たる井桁に橘の紋所は如何にして變化せられたるものか不明であるが、重忠公が房州に流された時は已に井桁と橘の紋であつたと言へば其れ以前に既に二個の紋所を合せて現在の如きものとしたものと思ふ。此處に一言すべき事は、此の紋所は共保が養父の共資より與へられたる事は何人も疑ふ事の出来ぬ事實である。現在其の井戸は井伊谷龍潭寺の門前約一町の畑中に現存し其の傍に橘の木があるよりして事實である。其の井戸は高さ三尺、縦横五尺に組み、其の傍に橘の木が植り共資公當時が思ひ出される様である。其の横に碑があり、正面には



正面左には

遠江引佐郡井伊谷八幡社中有御手洗之井上有橘傳稱余祖共保生於井中因以井伊爲氏以橘爲家紋以井爲幕之紋神異之事傳爲家瑞貞享五戊辰四月依守僧龍潭寺請新修造之歲又加再修仰冀泉源無窮家運興久遠波餘流施萬代焉。

正徳二年壬辰八月十五日

共保二十代後胤江州彦根太守正四位上行左近衛權中將兼掃部頭藤原朝臣直該

正面右側には

父直該貞享五年戊辰歲初修神井經十三年夷辰直惟出誕又經十三年正徳二千辰歲直該再修造今歲又再修焉伏冀馮神井冥應家運興隆傳井徳。

享保九甲辰歲八月十五日

共保二十一代後胤江州彦根太守四位行左近衛中將兼掃部頭藤原朝臣直惟

とあり、共保より二十代直該の時初めて此の井を修復したもので其れ以前は現在の如きものでなく、當時のまゝ荒廢して殘つてゐたものと考へられる。元徳二年は皇紀一九九〇年で共保出生より三百二十一年目に當り現在より六百七十年前に當るのである。

然らば此の井桁に橘の紋所を宗祖が果して御使用遊ばされたかと言ふ事である。御書を拜し

又古文獻を見ても宗祖當時宗祖が此の紋所を御使用になつたと言ふ事はない、恐らく其の御俗姓と共に御使用遊ばされなかつた事と思ふ。傳説によれば土の牢に於て日朗上人が橋の果を抱いて泣いたとあるが、是れは宗祖が橋の實が御好であつたのではなく其の紋所が橋であつた事を證する爲に後人が作つた傳説に過ぎないと思ふ。此處に注意しなければならぬ事は果して宗祖は此の紋所を御使用にならなかつたにせよ、紋所は井桁に橋であり後我が門下の紋所となつた事である、御縁祖共資公より出たる紋所が代々井伊家の家紋となり、又貫名家の家紋となつて御父重忠公に至つても以然として此の紋所を御使用になつた事である。此の紋所より見ても其の御系圖に間違のない事が知れやう。重忠公遠州より房州に流されたる時幕府の役人により持ち來りたる唐櫃に井桁に橋の紋所が付いてゐた事である。故に重忠公は此の紋所を御使用になつた事は事實に違ひない。然るに宗祖は此の紋所を御使用にならなかつたのは、その必要がなかつたからである、何故ならば東奔西走、五尺に足らざる身一つ置き所なき」大聖人故に御自身その紋所は一切御使用遊ばされなかつたと見るべきである。若し然らば、此の紋を我が門下として使用したのは何時頃かと言ふに、未だ研究中で何んとも言へぬ。

共資公共保に其の女を嫁せしめ、井桁に橋の紋所を與へ、新に井伊谷に新城を築き一切の國政を共保に譲ね、自身は村櫛に隠棲して靜かに余生を送つたのである。此の時共資公は七十歳

頃であつたらしく思はれる。是より村櫛を古城と呼び、井伊谷を新城と呼んだ。かくて共資公は、共保の廿五六歳の時七十五歳位で逝去し、其の遺言により裏山に葬つたのである、是より此の裏山を御山塚と呼んで村人達が尊崇してゐたのである。かくて共保は八十四歳逝去に至る迄共資の遺志を繼ぎ人民を愛撫し、諸國に其の威を示し年八十四歳寛治七年三月廿日井伊谷で逝去された。共資公の御逝去の年代は一切不明で只七月一日寂とのみしてある。共保公は井伊谷に葬られ龍潭寺に石碑が存して居り、一般に寛治七年八月十五日逝去となつてゐる。事實は三月廿日である、八月十五日としたのは此の日は八幡社の御祭典で、共保公は八幡社の申し子だから八月十五日が命日だとい般に考へられる様になり何時とはなしに八月十五日寂となつたのである。故に事實は三月廿日が命日で、祭典は八月十五日に行はれてゐた。何れにしても共保と八幡社とは或る關係ありとして結び付けられて來たのである。如斯共保は代々井伊家及び井伊谷村民によつて祭られ、又井伊の元祖となつた事も決して偶然ではない。

共保公が京都に歸落せず村櫛で余生を送つたから其の墳墓地は必ず村櫛村か或は其の附近にあるのが當然である。共資公が城を築き志津城と名け其の城趾が村の東南にあり、其の裏山に小高き丘があり、此の丘を古から御山塚と呼び其の附近一帯を淺間山と呼んでゐた。城趾は明治維新迄は昔のまゝであつたのが養魚が盛んとなり養魚池を造る爲め取り壊され今は古の城の

面影も残つてゐない。城は南殿と北殿とに別れ、其の御殿の間は平地であり、城の敷地は非常に廣大であつた。現に共資公の矢研石なる石が残つてゐる、其れは養魚池を造るに付き埋め堤の下になつてゐたのを最近堀り返して墳墓の前に出した。廣さ四尺に二尺位で厚さ一尺位の大石で、之が昔城内にあつたのを見ても廣大なる城廓であつた事が知れる。又お山塚の下に井戸がある、此の井戸は昔城内での飲用水に使用したものと思はれる。明治の初め頃迄此の地を城山とも呼び要塞堅固の城下であつたとは土地の古老の言である。矢研石は昔から庄内樽松の氏子が春日神社の祭典に此の石で矢を研ぎ村内をねり歩いたとの事で、共資公當時の遺物として貴重なる參考資料である。又維新前當時の大老井伊掃部頭直弼は其の臣を遣して村柳のお山塚を調べさせたが當時の村人は後の係り合を恐れ事實を否定して何等語らなかつたので井伊家に於てもやむを得ず塚にありし藤を一枝持ち歸つたと、田中長藏と言へる村人が語つて居る。城趾は現在にあつては、只田畑或は養魚池で城廓としての何物をも存してゐない。昔より此のお山塚に手を觸れたる者は必ず病み、村人達は此の地を千古の不思議として明治迄來たつたのである。然も村人達は此の由緒ある城趾並にお山塚一帯を崩して養魚池とする計畫が進み、附近一帯は堀返へされて養魚池となり、やがて此のお山塚も同様の運命に陥る計畫であつた。多年此の地こそ共資公墳墓の地なりと考へたる鈴木智精師の驚き一方ならず、先ず其のお塚の周圍なりとも土地を買収し此の聖

跡を保存せんと遂に大正七年に此の地を師の手に歸せしめ、以來數回今日に至る迄附近の地を買収し、遂に多年の宿望たり、一生の大事業たる共資公報恩供養塔建立の運びに至り昭和七年十二月十一日此の大事を大成するに至つた。惟ふに龍潭寺に於ける井伊家代々の當主逝去に際しての法華經讀誦と言ひ、今亦共資公が宗門の師により發見供養せられる事と言ひよく、法華經に因縁深き事にて、古來お山塚に手を觸れたる者は必ず病みたるに、師によりてなされたる時は何等の異變もなきは、惟ふに共資公は法華經に縁あり、法華經の供養を受けん事を願つてゐたのであらう。由來村柳村は明治迄は佛教徒であつたが維新の廢佛毀釋の際全部神徒となり、現在五百五十戸の同村は其の九割を神徒にして僅か一割が佛徒で、然も其の佛教徒も禪宗である。又井伊谷龍潭寺も共に禪宗である。宗祖日蓮大聖人の御縁祖たる共資公が若しも他宗の人の手により發見せられ、更に供養を受けたとせば吾々日蓮門下として如何に宗祖に面ゆる事が出來やう。此處に着眼し孤軍獨立遂に三十余年苦心慘憺の結果此の聖跡を我が門下のものとせる師の苦心努力、其の功績は蓋し不朽なるものと言ふべきである。

師が初めて發見せし當時は荒廢したる畑で只僅かに大石の頭が地上に現はれてゐたのみであつた。發見されたる墳墓は二個のカロウトウより成り中には劍、花器、土器、玉等があり、何れも千年以上の物にして、明治四十一年村民によりて發掘せられたる事あり、其の時是を堀りたる者は病に罹り更に家が滅ぶ

故に皆恐れて元のまゝにして置いたとの事で、此の時掘り出されたる土器の一個が村櫛の某所に保存せられ、又其の時の劔を静岡の藝文庫に史料として保管されてある。カロウトウは長さ五尺、巾四尺、高さ三尺位で石と石とを組み合せ中を空に洞としたもので其の上には天然石が蓋とせられてゐる。其の天然石の頭が僅かに一寸位地上に現れてゐたのを頼りに掘り下げて行つて此の地こそ墳墓なりとしたのである。其の二個の塔は一個は共資公のものであり、他の一個は恐らく奥方のものと考へられる。

現在その上に縦三間半、横二間のコンクリートの柵を廻らし中に土満中に丸く土を盛り其の前に大供養塔が建てられてあるお塚は前方は濱名湖を一目に見下ろし、遠く太平洋を望み、後には千古白雪を頂く靈峰富士が巍然として聳へ立つてゐる極めて風光佳麗の地にして、偉人日蓮大聖人御縁祖の墳墓としては眞に適したる地である。

九百年已來地下にあつて何等供養を受けられなかつた共資公は、今や我が日蓮大聖人の御縁祖として鈴木師により世に公にせられ、日蓮聖人の流を汲む宗門人としての吾々もかゝる喜びはない。此の慶事はやがて宗門として、宗門の一大事業として此の共資公を宗祖の御縁祖たる證明を與へ、宗門の村櫛として是を宇内に宣揚しなくてはならない。之れ門下としての目下の急務である。

只單なる梅陀羅の子として七百年已來考へられたる宗祖も藤

原氏の末裔たる由緒ある名門の出たる事が證明せられた。恐らく宗祖としても此の御俗姓に關する事は上行再誕としての日蓮とと共に、藤原氏の末實名重忠を父として御誕生遊ばされたる御自身を御考へ遊ばされた事と思ふ。然も御書中に御系圖に關する事の無いのは前説の理由によるものである。宗祖が藤原氏の末裔たる事が明となり、縁祖共資公の墳墓が発見され、此處に不明なのは實名氏の祖政直以來の事蹟である。

◎村櫛村の現状と是が保存

縁祖共資公墳墓地たる村櫛は静岡縣引佐郡にあり、濱松より西約五里の濱名湖の突出せる所にあり、辨天島より巡航船の便あり、又濱松より乗合自動車の便がある。戸數五百五十を有し職業が盛で、半農半漁で近年養魚が非常に盛となつた。村民は大体裕福なる生活をなし、宗教は全村の九割迄が神徒で他は禪宗である。寺院は禪寺が一ヶ寺あるのみである。明治維新迄は村の全部が禪宗に歸依してゐたが、時の代官が先頭に是等の寺院を全部焼拂ひ住職を追ひ、暫く無宗教の状態にあつた。此の寺院を焼拂つた代官は熱病に罹り其の他の暴徒も悉く或は發狂し、或は熱病に、或は死亡し子孫に至るも猶其の影響を受けてゐる。維新後村民の全部は神徒となり、近年に至り村民の一部が暴逆の報を恐れ禪寺を建立し、村の一割が之に歸依するに至つた。然れ共其の大部は依然として神徒である。村人の殆んどは無宗教の如き状態で報恩觀念乏しく、他村との往復少く、か

ゝる村民を對手に此の聖跡を保存せんとした師の苦心の程は察するに余りある、初め此の遺跡の譲渡を交渉せる時村人達は取り取りの噂をなし、皆冷笑をあびせた。然れ共師はかゝる事に頓着せず、自己の信念に向つて邁進し遂に此の地を譲與せられた。此の頃村民の中に郷土愛護會なるものが組織され、此の地の由緒あるを知り共に保存せんとする議が興り、漸く此の事業が是等の村民により解せられ、現在に於ては村の大部が宗祖の信者として題目を唱へ信行する様になつた。然れ共此處に一寺を建立し村人をして我が門下に改宗せしむるにはまだまだ遠いのである。一村改宗の氣運がないでは未だ其の時機でない。此の村櫛一村を改宗せしめ宗祖の膝下に跪かしむる事こそ吾々門下に與へられたる任務である。村櫛一村改宗せる曉こそ共資公も眞に日蓮大聖人の御縁祖として村人に尊敬せらるゝ時であり、かくしてこそ此の地に一寺を建立し眞に教線擴張し宗祖に對する報恩の意義も存するのである。

曾て昭和八年復興祭を修したる時村民一同太鼓を手に唱題し乍らお山塚に至る間騒々と行列したのである。又越へて昭和九年身延山法主現管長望月日謙祝下静岡縣下御親教の際には、わざ／＼村櫛に御参拜なされた、此の時全村の小學生、青年團、處女會、消防組等老も若きも男女を論せず總出で法主祝下を御迎へ申し上げ、異教の空に時ならぬ題目の華が咲いたのである。望月祝下には非常に御感激の事の様に拜して居る。昭和の半迄題目の聲さへ聞えなかつた此の海邊に今や除々に題目の華が開

かんとしてゐる。是れ九百五十年の昔縁祖共資公が初めて此處に卜し、後日蓮聖人を出し、今又鈴木師の懸命なる努力の結果此の成果を得るに至つたのである。今や此の聖跡を有する村民が擧つて郷土愛護會なるものを組織し、此の由緒ある遺蹟を長く保存すべく計畫してゐる。誠に喜しき極である。二十年前此の地を壞して養魚池とせんとした村民が、鈴木氏と共に此の地を長く後世に傳へ、廣く世間に紹介せんとしてゐる。是を閑浮堤に歸依せしめんとする第一歩は即ち村民の歸依であり、村民の歸依はやがて一郡の歸依となり遂に閑浮に歸依せしむる事が出来るのである。今僅かに其の發生地たる村櫛すらも歸せず、只發端を爲すのみである。吾門下の使命として近き將來に於ては必ずや此の村櫛をして宗門の村櫛として世に紹介すべきである。是れ吾等に課せられたる重大なる使命である。

◎余論

共資公下向して初めて村櫛に居城した事は明なるも其の墳墓地に至つては何人も知る事が出来なかつた。只村櫛に住せし故或は村櫛に其の遺蹟が存せしかとの疑問は抱いてゐた。然も此の疑問の解決は九百年已來何等具体的方法が講ぜられず、只傳説として村の東北の小高き丘をお山塚と尊稱してゐたのみであつた。然るに明治四十年頃村人によつて此のお山塚が發掘され種々なる遺品現れ、其の一部は東京、静岡及び同村に、殘餘は其のまゝ其の地に埋め、堀り出されたる品は何れも千年以上の

物にて共資公の使用せる事歴然としてゐる。鈴木師は既に其れ以前に同村の何れにか必ず墳墓があるを考へ、其の地を尋ねる事切なるものがあつた。大正七年村の長老田中長藏氏より此の發掘せし事と、明治の前井伊家よりお山塚を尋ねし古事を聞き此の地こそ正しく縁祖の墳墓なる事を確信し、是を自身の一事業として世に公にし以て宗祖への御報恩に擬せんと企たのである。發見された古墳が果して共資公の墓地なるや否やを吟味して見やう。現今のお山塚のある岬を志津崎と言ふ、昔志津三郎が初めて此の地に城を築きたる故其の附近を總稱して志津岬と言つてゐた。此の志津三郎とは共資の別名である。古書により共資公が此の地に卜し最後又此の地に永眠したのであるから村櫛か或は其の附近に墳墓があるに決つてゐる。龍潭寺並に井伊家に於ても是を尋ねてゐた事も無理はない。發見された遺品が一千年前後の物であり、此の時代共資公を除いて此の地に住した有名な人の無かつた事、村人が尊崇してお山塚と呼んでゐた事、明治初年迄城趾があり、南北兩殿に分れ其の中間に平地があり、要塞堅固なる城廓であつた事等種々綜合するに正しく共資公の墳墓なる事明である。此に着眼し三十余年遂に此の地に供養塔を建立し、一寺院建立の計畫中なのが鈴木師である師が今後如何にして聖蹟を保存し、世に公に紹介し宗祖の御縁祖として發表するか其の完成の一日も早からん事を祈ると共に宗門として此の大事業を援助し共に此の大事業の完成を期すべきである。

上來述べ來つた宗祖の御系圖並に新に發見されたる御縁祖共資公に就ては宗祖滅後六百五十五年を歴たる今日何人も發見されない事實である。故に古來の説とは非常なる間隔がある。即ち藤原氏と三國氏との關係、共資、共保間の消息、井伊神社と八幡社、貫名氏等であり就中縁祖共資公墳墓に就ては何人も一言も觸れてゐない。殊に宗祖として一般に認めざる御俗姓を主張し、旃陀羅の子を由緒ある名門の流なりと斷定したる事に就ては、諸師諸先輩の謗を免れないかも知れぬ、然し以上述べたる事由により旃陀羅が子としての宗祖を藤原、三國の末流なりと證明を加へたのである。生の淺學にしてかゝる研究は潜越なるかも知れぬ、が然し宗祖に對する報恩の一分として此の難事を敢てしたのである。願くば諸師先輩、生の及ばざる所は責める事なく不足せる部分は補ひ以て本研究の完成へと御指導下されん事を。

生此の稿を起すに當り、井伊谷龍潭寺、村櫛村、貫名山、横尾及び小湊等處に關係を有する地を尋ね、或は書し、或は聴き又は寫し、事實と傳説と對照し以て不完全乍ら此の稿を脱する事が出來た。然れ共未だ不完全極まり不足せる部分多く研究中なる部分多々ある。此の研究は生の一生の事業として進むべく未だ着手して日尙淺く充分研究する暇なく今後の研究を俟ち大成せんとする念願である。以上を以て本稿を終る。

南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經

昭和十一年六月十五日